

【医学モデルと社会モデル】

さて、「医学モデルと社会モデルの違いってなに？」と問われてどのくらいの方がすぐに答えることができるのだろうか？それが今回のテーマ。

先日のある職員研修会でのこと、参加者が60名程度、医学モデルとか社会モデルとかいう言葉、知っている人いますか？って聞いて、残念ながら知っていた人は一人だった。

2011年、障がい当事者の方々が「私たち抜きで私たちのことを決めないで！」をスローガンに生み出した障害者基本法の改正、2014年に、やっと批准することができた（日本は世界で140番目の批准国でした）国連の障害者権利条約、しかし知的障がい者教育・支援現場での理解度はこんなものなのであります。

そして、たとえ医学モデルと社会モデルの知識があったとしても、教育・支援現場で自覚的にこの違いを実践している方々は、まだまだ少数の方々であると想像するのです。

もちろん、医学モデルが障がいを理解するための旧モデルで、社会モデルが新モデルです。

さて、ここに「あとすべり台を2回滑ったら帰るよ」と言われて、確かに2回滑り、「それじゃおしまいね、帰るよ」と言われて、「もっと滑りたい」とパニックになっている子がいたとします。医学モデルの障がい者観で対応すれば、障がい当事者にその原因を帰結させるわけですから、わからないあなた、我慢できないあなたが悪いと、叱りながら無理に連れて帰るといような係わりが生じます。一方、社会モデルの発想に立てば、障がいは障がい当事者の中にあるのではなく、障がいのある方と私との関係の中に障がいがあると考えるので、2回滑ったら終わるといことが理解できない障がい当事者と、2回滑ったら終わるといことを理解できるように伝えられない私との関係に障がいがあると考えます。伝わらない者同士がここに居て、そこに障がいがあると考えるわけです。したがってそ

の対応は、〈もっと滑りたかったんだよね〉と共感しながら、〈すべり台のイラストを2つ描いて、その次に家に帰るといイラストを描いて、上から下へと並べる〉というような視覚的な情報をともなしたスケジュールを提供し、理解してくれたなら、〈よく我慢してくれたね〉とポジティブなメッセージを送る、そしてさらに〈口で言っただけではわからなかったね、ごめん〉と謝罪の言葉を添える、いようなかたちになります。

理解できないあなたが悪いのではなく、理解できるように伝えられない私にも責任があると考えます。これが社会モデル、関係論的な新障がい観です。

不穏状況になると必ず「ドラえもん」と叫ぶ彼がいます。彼の伝えたい本当の気持ちは回りに伝わりません。「ドラえもんは今日はやらないよ、日曜日だよ」なんて言われたりしています。彼の不穏状況はもちろん収まりません。しかし、この状況の原因を彼のコミュニケーション障がいに帰結させてはいけません。それでは旧モデルの医学モデル－実体論的な障がい観に陥ってしまいます。「ドラえもん」と叫んでいる彼の本当の気持ちを理解できない私がいるとしたら、2人の関係は、伝わらない者同士ということであり、その関係こそが障がいなのです。

ちょっと工夫してみましよう。〈ドラえもん〉の連想ゲームです。〈ドラえもん〉と言えば？→猫？→どら焼き？→未来？→日曜日？→四次元ポケット？→いつでも助けてくれる？→どこでもドア？、どどん連想ができますね。

さて、この中に彼の本当の気持ちに近いものがありそうでしょうか？不穏状態の時に良く叫ぶというヒントがありますね。とすれば、彼の気持ちは「助けて！」でしょう。いかがですか？

伝わらない者同士がそこにいる。その関係の中に障がいがある。そこで一緒に考える。悩む。理解し合おうと努力する。それが新しい障がい観、社会モデルなのです。